

# 知求会ニュース

2022年05月

第82号

## ◎ 修士課程、入学おめでとうございます！

国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて6名および多文化共生学プログラムにおいて17名が入学しました。

## ◎ 着任教員紹介その26

スギット サンジャヤ アルジョン 国際学部助教

スギット サンジャヤ アルジョン先生が、3月1日付で着任されました。

① 氏名（英文表記）：スギット サンジャヤ アルジョン (*Sugit Sanjaya ARJON*)

② 専門：グローバル・ガバナンス概論 と 地球市民社会論

③ 前職：客員研究員、非常勤講師

④ 趣味：サッカー、料理、ハイキング

⑤ 自己紹介：

私は2022年3月から国際学部で仕事をしています。私はずっと昔から学界で活動する機会や可能性を夢見てきましたが、ついにここにいるのは素晴らしいことだと思っています。

私は経験的な研究に強い関心を持っている政治学者です。私の研究では、定性的なアプローチを使用し、争いのダイナミクスを理解し、戦闘が発生した理由と方法に関するストーリーを解き明かしています。例えば、地域の自治、汚職事件、軍事的影響、国家の政治的統合の影響など、地域の政治的なダイナミクスを調べることにより、紛争後の分析に関する学術的な議論を共有することを目的としています。

現在の研究のほとんどは、東南アジア、特にインドネシアの紛争後の地域、民主化、国家の暴力、安全保障、政治王朝、および政軍関係に当てはまります。

私のクラスでは、学生たちがディスカッションを通じて積極的に参加して頂くことを願っています。

(2022年4月13日原稿受理)

申惠媛 国際学部助教

申惠媛先生が、4月1日付で着任されました。

① 氏名（英文表記）：申 惠媛 (SIN Hyewon)

② 専門：社会学

③ 前職：特任助教

④ 趣味：読書

⑤ 自己紹介：

初めまして、申惠媛と申します。韓国ソウル市に生まれ、熊本や東京で幼少期や学生時代を過ごしてきました。4月からは宇都宮という街に新たにご縁ができたことを大変うれしく思っています。専門は社会学で、これまでは特に東京都新宿区大久保地域に形成されたエスニックな観光地「新大久保」を対象に研究を進めてきました。地域における「多文化共生」には、文化的背景等の異なる人々が隣り合って住むことで生じる諸課題が挙げられることが多いですが、韓流・K-POPブームを追い風に進んだ急速な観光地化は街の人々にどのような変化をもたらしたのか、という問いに取り組んできました。このように刻々と姿を変えていく「多文化共生」について、これを大きな柱としている宇都宮大学国際学部で学びを深められる機会を得られ、とてもわくわくしています。どうぞよろしく願いいたします。

(2022年4月13日原稿受理)

## ◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞（令和4年3月29日）1面に、《明日への選択 栃木市長選<sup>㊤</sup>》コーナーで「現職4年の成果強調」および「新人「公約未達成」と批判」と題して、**高際澄雄**（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞（令和4年3月28日）28面に、《明日への選択 栃木市長選<sup>㊤</sup>》コーナーで「スタジアム巡り対立」および「税など免除「公益性」争う」と題して、**高際澄雄**（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和4年3月29日）22面に、《明日への選択 栃木市長選<sup>㊤</sup>》コーナーで「独自の「無料化」訴え」および「違い見えにくく浸透課題」と題して、**高際澄雄**（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
4. 下野新聞（令和4年3月29日）17面に、「日本の国際協力地域ごとに解説」「執筆陣に宇大関係13人」および「在り方考える3巻刊行」と題して、**重田康博**（国際学部客員教授）先生と**阪本公美子**（国際学部教授）先生の記事が掲載されました。
5. 下野新聞（令和4年3月31日）21面に、「「露も多元的」認識訴え 宇都宮大 大野准教授」「二項対立先鋭化に警鐘」および「文学は異文化理解の契機」と題して、**大野斉子**（国際学部准教授）先生の記事が掲載されました。
6. 毎日新聞（令和4年4月9日）25面に、「市政継続か刷新か」「栃木市長選 一騎打ちの公算」および「あす告示」と題して、**高際澄雄**（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。

7. 下野新聞（令和4年4月12日）1面に、「栃木市政 継続か刷新か」「市長選告示、現新が舌戦」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
8. 毎日新聞（令和4年4月12日）21面に、「栃木市長選一騎打ち」「現新2氏 サッカー場問題争点 告示」および「公正な市政を実現」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
9. 下野新聞（令和4年4月13日）24面に、「栃木市長選立候補者の横顔 右から届け出順」「学問の世界から政治に」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
10. 毎日新聞（令和4年4月13日）23面に、「栃木市長 選候補者の横顔（右から届け出順）」「裁量行政に強い不信」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
11. 下野新聞（令和4年4月14日）21面に、「栃木市長選立候補者アンケート」および「高際氏 市政運営 公正公平に」「栃木市長選 「合併効果」 見解に相違」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
12. 下野新聞（令和4年4月15日）22面に、「栃木市長選 終盤情勢 大川氏リード、追う高際氏」「市街地票掘り起こし鍵」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
13. 下野新聞（令和4年4月16日）1面に、「栃木市長選あす投票」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
14. 毎日新聞（令和4年4月16日）23面に、「栃木市長選あす投票」「継続か刷新か 一騎打ち」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
15. 下野新聞（令和4年4月18日）1面に、「栃木市長大川氏再選」「新人高際氏に大差」「投票率 52.14%」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
16. 下野新聞（令和4年4月19日）23面に、「栃木市長選出口調査」「大平、藤岡は高際氏過半数」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。
17. 毎日新聞（令和4年4月19日）19面に、「栃木市長選開票結果」「戦い方足りず」高際氏敗戦の弁」と題して、[高際澄雄](#)（国際学部名誉教授）先生の記事が掲載されました。

#### ◎ 国際学部だより

1. UU now 第54号（令和4年4月20日）4頁に、『特集2 新入生応援企画 宇大生の「3C精神」＋「3Cアクション」』コーナーで「心が通うサポートで安心した大学生活を」の題で[遠藤伶菜](#)さん(国際学部国際学科2年)の記事が掲載されました。
2. UU now 第54号（令和4年4月20日）5頁に、『特集2 新入生応援企画 宇大生の「3C精神」＋「3Cアクション」』コーナーで「子どもの異文化・国際理解のために」の題で[下村由紀那](#)さん(国際学部国際学科3年)の記事が掲載されました。

3. UU now 第54号(令和4年4月20日)6頁に、『特集3 「教員おススメの1冊」を紹介しす ―ウィズコロナの今、読みたい本―』コーナーで「感染症と文明―共生への道 山本太朗 著 岩波新書」の題で**高山道代**先生(国際学部准教授)の記事が掲載されました。

## ◎新刊案内

1. 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、**多文化公共圏センター年報** 第14号 282頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに 国際学部附属多文化公共圏センター長 **湯澤伸夫**

### I 特集

#### 特集1 多文化公共圏センター14年を振り返る

「開かれた議論の場」である年報での足跡を振り返る **田巻松雄**

「グローバル・イシューへの旅 ―多文化公共圏センター14年を振り返って―」

**重田康博**

#### 特集2 コロナ時代

「大学における効果的な感染症対策を目指して

―コロナ禍における教室での手指消毒行動の誘発実験から見えてきたこと―」

**栗原俊輔・糸井川高徳**

「コロナ時代の国際キャリア教育セミナー」

**重田康博**

「コロナ禍と学生生活 2021 年度の報告

―学務委員会による対応と学生ピアサポート活動―」

**清水奈名子**

#### 特集3 国際学部の SDGs の取り組み

「「アフガニスタンと平和」シンポジウム①

紛争下におけるキャリア形成 ―平井礼子氏と宇大生による座談会―」

**藤井広重**

「「アフガニスタンと平和」シンポジウム②

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター・連続セミナー実施報告書」

**清水奈名子・藤井広重**

「UU3S (Utsunomiya University Students, SDGs, Solution) プロジェクトの

取り組み」

**高橋若菜**

### II 投稿論文

#### 【論文】

「映画が映し出す格差社会

―『パラサイト 半地下の家族』から読み解く『万引き家族』の世界―」

**丁 貴連・鈴木アリサ**

「国際人権教育における子ども・若者参加の実践と課題

—『人権』と『参加』をめぐる課題解決型学習（PBL）の試み—

藤井広重・横山友輝・福原玲於菀

「チェコ季語の摸索 —初夏を詠む—

松井貴子

“Preliminary Analysis of the Evaluation of International Workshops on Sustainable Cities Held Jointly by The university of Danang and Utsunomiya University—  
Feedback via questionnaire on DUT and UU workshops held from 2018 to 2021—”

DOBASHI Yoshito, OHMORI Nobuaki, YASUMORI Akio,  
NGUYEN Anh Tuan, NGUYEN Minh Hai, DO Viet Hai

“Sustainable urban development and land-use change in Utsunomiya”

「宇都宮市における都市の持続可能な発展と土地利用の変化」

Carl Salk & Bernadett Kiss

「人口減少下の中規模自治体における地域計画策定過程をめぐる諸問題

—A市における地域適正化計画策定過程を事例に—

北島 滋

「香害被害にみる他者の受苦を理解する難しさ」

佐藤春菜

「1930年の北京に暮らす日本人恐竜民たち

—「北方行」（1933—1936）を手がかりに（上）—

陳 佳敏

「外国人介護人材受入・育成・定着の実践モデル構築に向けて（1）

—わが国の外国人介護人材を巡る現況及び問題点を探る—

堀 強

「タンザニア4地域における食品摂取頻度の地域比較及び季節比較」

武藤杏子・阪本公美子・津田勝憲・大森玲子

「宇都宮における蕪村の句碑について —「宰鳥」から「蕪村」へ—

蔡 麗文

### 【研究ノート】

「外国人学生の日本語習得と母語からの言語的距離：

『HANDS10年史』国際学部外国人学生体験レポートを起点に」

佐々木一隆

### III 活動報告

1 ニュースレター『HANDS next』

2 国際交流都市日光の再発見

—「奥日光の自然を活かした観光地づくりを留学生と考える」

3 「福島原発震災に関する研究フォーラム」2021年度の活動報告

4 第13回グローバル教育セミナー「気候変動問題 SDG13 とグローバル教育」

5 「『日本の国際協力』—出版記念シンポジウム—」報告

6 「『ニョタのふしぎな音楽』出版記念シンポジウム」報告

7 「Potentials of wild edible plants and traditional foods in Africa: Findings from Tanzania」報告

- 8 「国際平和と人権・人道法研究会」2021年度の活動報告
- ① 「国際人権・人道法プロジェクト」と「国際人権ワークショップ」実施報告書
  - ② 宇都宮大学 SDGs オンライン連続講演会・Global Week to # Act 4 SDGs  
「コロナ禍のもと、国際人権について考える」実施報告書
  - ③ 「国際協力機関インターンへのプロセスと活動」学生座談会
- 9 公開セミナー報告
- 「語り継ぐ足尾」～苦境の中で生活する人々がいた、ということを知ってほしい～

#### IV 関連資料

- 1 組織・年度活動報告
- 2 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱
- 3 新聞記事

#### \* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第27号(2022年3月4日)

2021年度第二回外国人児童生徒教育推進協議会報告

国際学部教授 田巻松雄

「多言語による高校進学ガイダンス」

2度目のオンライン多言語による高校進学ガイダンス

多文化公共圏センターコーディネーター 鄭安君

「多言語による高校進学ガイダンス」

共に学ぶ場となる多言語進学ガイダンス

国際学部3年 セキブンカン

学生ボランティア感想

O君の学習支援～青空を見上げて～

国際学部4年 遅宸琳

学生ボランティア感想

学習支援を通して感じたこと

大学院地域創生科学研究科1年 アギーレナルミ

学生ボランティア感想

学生ボランティアを受け入れて

宇都宮市立旭中学校 日本語指導教室担当 船山千恵

## 学生ボランティア感想

ボランティアの方へ 感謝をこめて

真岡市立真岡小学校 日本語教室主任 菅谷眞由美

## 令和3年度子ども国際理解サマースクール報告

内なる国際化

国際学部3年 下村由紀那

より広い世界へ

大学院地域創生科学研究科2年 崔 敬恩

## とちぎ自主夜間中学と外国人児童生徒

勉強になった2つのボランティア活動

国際学部1年 清本まゆみ

## とちぎ自主夜間中学と外国人児童生徒

教育を受ける権利

国際学部2年 黒澤実奈

「第21回 高校進学・進路ガイダンス 主催者交流会 in 千葉」開催報告

国際学部教授 田巻松雄

## 事務局だより

—令和3年度活動—

1. 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
2. 外国人教育相談（栃木県国際交流協会）：月1回（新型コロナウイルスの影響でオンラインや電話で随時対応）
3. 授業科目「グローバル・イシュー研究演習ⅠⅡ」開講（前期・後期）
4. 「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」および「とちぎ自主夜間中学」への協力：
  - 3月7日 「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」発足
  - 6月6日 夜間中学ドキュメンタリー映画上映会（小山市）
  - 6月26日 夜間中学ドキュメンタリー映画上映会（宇都宮市）
  - 7月4日、7月11日、7月18日、7月25日 入学説明会
  - 8月8日 「とちぎ自主夜間中学」開校式・入学式
  - 10月～ 「とちぎ自主夜間中学」開講（宇都宮校：月4回、小山校：月1回）
5. 子ども国際理解サマースクール（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）：8月3日
6. 外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）
  - 第1回 2021年9月16日（宇都宮市東生涯学習センターおよびオンライン開催）
  - 第2回 2022年1月20日（オンライン開催）
7. 多言語による高校進学ガイダンス
  - 9月20日 オンライン開催
  - 10月2日 キョウトウとちぎ蔵の街楽習館（栃木市教育委員会と共催）

8. ニュースレター『HANDS next』第 27 号の刊行：3 月中旬

9. 栃木県における外国人生徒の進路状況調査：2 月～3 月

3. 国際学部田巻松雄研究グループより 3 月 31 日に、『公立・自主夜間中学の社会的意義と課題を考える集い』の記録集 86 頁が刊行されました。

**研究室訪問 55** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

### 「グローバル・イシューに関わる研究テーマについて 一定年退職に伴う所感として」

重田 康博

筆者（重田）は、本年（2022 年）3 月一杯で 15 年務めた宇都宮大学国際学部を「65 歳定年退職」した。正直定年退職と聞いても実感が沸いてこない。この度編集長の土屋さんから『知求会』への原稿依頼をいただき、さて何を書くかなと考えた。丁度 3 月 12 日「最終講義」の「グローバル・イシュー」の中で、筆者の大きな研究テーマとして「国際 NGO 研究」「グローバル市民社会研究」「グローバル開発協力研究」を取り上げたので、以下著作を紹介しながら私の研究を振り返りたい。

グローバル・イシューとは、混迷の時代の地球規模の問題、地球的諸課題であり、今日世界各地で、国家の侵略と人道危機、感染症拡大、自然災害、気候変動、人権侵害などの問題がある。2000 年以降、発展途上国と先進国間の「南北問題」は、やがて「グローバルイノベーションの問題」へと変化した。急速に進むグローバル化は、豊かな国々、IT 企業、資産家が存在する一方、貧しい国々や貧困者を生み出し、豊かな先進国と途上国の格差、都市の農村の格差、富裕者と貧困者の格差などグローバル化に伴う「格差」のグローバル・イシューの問題の浮上がした時代である。2000 年に開催された「国連ミレニアム総会」では「ミレニアム宣言」が出され、2001 年には「国連ミレニアム開発目標（MDGs）」が設定され、MDGs は途上国を対象に 2015 年までに実現する 8 つの開発目標が打ち出された。

この時代、「国際 NGO 研究」の初めての単著として、2005 年に『NGO の発展の軌跡—国際協力 NGO の発展とその専門性』（明石書店）を発行した。本書は国際 NGO がなぜ近代社会の中で誕生したのか、NGO の開発協力、政策提言、国際政策キャンペーン、アカウンタビリティ、政府とのパートナーシップなど活動の専門性をいかに発展させてきたのかについて、NGO の事例を通じて考察した。本書では、特に「アジア共生社会」の中で日本の NGO 活動の役割を考えた。特に 1970 年代以降アジア学院の高見敏弘やシャンティ国際ボランティア会の有馬実成などは「共に生きる」と考え方を提示しているが、本書では日本の NGO が「アジア共生社会」を実践している事例を紹介した。



2010年代に入ると、2011年3月11日には東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が発生し、東北・福島周辺地域に多くの震災津波および放射能汚染被害をもたらし、多くの住民が被災し、避難した。2015年9月には「国連持続可能な開発目標（SDGs）」が全会一致で提案され、「誰一人取り残さない社会」の実現のために、2030年までの17の開発目標と169のターゲットが出された。

続く二つ目の「グローバル市民社会研究」に関わる単著として、2017年に『激動するグローバル市民社会—慈善から公正への発展と展開』（明石書店）を発行した。本書は、急激にグローバル化する21世紀の国際社会の中で、グローバル市民社会の発展の理論と実際を検証し、国際NGOが戦争被災者や難民への人道支援活動としての「慈善」から、グローバルな構造的な問題を分析し、問題の解決に向けて「公正」を求める活動へと発展し展開した過程を紹介し、NGOの新しい役割やSDGsへの貢献、異議申し立ての活動を検討した。

筆者の三つ目の大きな研究テーマとして、「グローバル開発協力研究」がある。グローバル開発協力研究の代表編著として、重田康博・真崎克彦・阪本公美子編著（2019年）『SDGs時代のグローバル開発協力を考える—開発援助・パートナーシップの再考—』（明石書店）がある。本書は、今、開発援助から開発協力への転換期を迎え、地球規模の課題解決のために多様な担い手との包括的なパートナーシップ構築が求められている。経済学者の西川潤氏が提唱した「グローバル開発協力」を探求し、多文化、平和、人権、環境を尊重し、全員参加型で援助を行う倫理的開発協力が必要性を求める。「序章」「第1章戦後の開発論の変化とグローバルな貢献」「第7章カンボジアの格差・貧困問題に関する考察—日本のNGOによる支援活動を事例に—」を担当した。特に第7章ではカンボジアの「新しい貧困の罠」として①農業と環境の危機、②人間の基本的権利の危機、③経済のグローバル化の危機の3つの危機を検証した。

この他の「グローバル開発協力研究」の代表編者として、重田康博・太田和宏・福島浩治・藤田和子編著（2021年）『日本の国際協力 アジア編—経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』（ミネルヴァ書房）を発刊した。本書は、日本の政府開発援助（ODA）の21世紀の国際協力の課題を考えるための基礎的判断材料と論点を提供した。日本のODAは、賠償から始まりアジアの国々の経済成長に貢献してきたが、日本の国際協力は今度どうあるべきなのか、その歴史を振り返り、アジア諸国におけるODAの事例と課題を検証した。松下冽・藤田和子監修『日本の国際協力』シリーズは、宇都宮大学教員・修了生・卒業生も執筆者として参加し、アジア編、中東・アフリカ編、ラテン・アメリカ編が発行されている。

以上「グローバル・イシュー」に関わる筆者の大きな研究テーマとして、「国際NGO研究」「グローバル市民社会研究」「グローバル開発協力研究」の著作を紹介した。私の長年の活動の成果が現在の国連「持続可能な開発目標（以下SDGs）」の広がり結びについているかどうかは正直わからない。しかし、今日グローバル・イシューはSDGsも含めて解決されないばかりか、紛争と人道問題、世界の経済格差問題、人権や環境問題は一層深刻

になり、その解決は日本を含めた先進国の責任の問題であり、私たちのライフスタイルの見直しに関わっている。筆者が宇都宮大学国際学部にも所属した15年間の間にも2011年の東日本大震災・福島原発事故、2020年の新型コロナウイルス感染症によるパンデミック、2022年ロシアのウクライナ侵攻など大変な出来事に直面した。

今後我々人類は大変な時代を生きることになる。是非宇都宮大学卒業生、大学院国際学研究科修士や関係者の皆様が力を合わせてグローバル・イシューの困難な問題の解決に向けて協力・連携していくことを心から願いたい。15年間ありがとうございました。

(2022年3月27日原稿受理)

**博士録 60** 第22号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

### 「在韓高学歴中国朝鮮族の生活、意識、適応の研究」

鄭 春美

#### 博士論文要旨

高学歴中国朝鮮族にも韓国社会への適応問題はある。学歴が高ければ適応問題は解消されるという単純なものではない。仮にかれらの適応が比較的良好だとしても、それは様々な形での適応戦略の在り方が関係するでしょう。

本論文では、上記のようなことを問題関心とし、在韓高学歴中国朝鮮族に焦点を当て、高学歴者の人的資本、朝鮮族という属性、個人化等の3つの着眼点から、かれらの移動過程や移動先（韓国）での社会生活の適応状況を把握した。そして、その背景と適応戦略を明らかにすることで、少数集団としての個人や家族の戦略を浮き彫りにし、出来るだけ多面的に問うことを目的とした。かれらの様々な側面における生活実態、意識変化、適応状況、適応戦略については、韓国ソウルでアンケートとインタビュー調査、参与観察で情報とデータを収集した。

本論文の「序章」では、問題の提起、研究目的と研究方法、研究構成に加え、高学歴中国朝鮮族の韓国への大量の移動の背景を述べた。

第1章「理論と先行研究の整理」では、移動と社会適応に関する同化理論、葛藤理論、個人化理論の導入と社会適応に関する先行研究と比較分析した。

第2章「韓国政府の外国人専門人材誘致政策」では、外国人専門人材の韓国での滞在と推移状況、一般研修制の導入、「Study Korean Project」政策から2023年までの留学生誘致政策の拡大実施まで、ごく近年までの韓国政府の政策と情報を整理した。

第3章「朝鮮族の移動状況、移動要因、特徴と変化」では、朝鮮族自身の移動した軌跡に沿って、朝鮮族の移動史を整理した。

第4章と第5章では、在韓高学歴中国朝鮮族の適応状況に関する調査内容で、韓国ソウルでのアンケート調査Ⅰ（仮調査）とⅡ（本調査）を整理検討した。調査は、主に20代から40代の高学歴中国朝鮮族を対象とし、2017年4月上旬～2019年9月まで実施した。調

査票の回収と配布は、ネットワーク上での収集と韓国にある諸団体（高麗大学校、韓国・北京中央教会、新春教会、在韓中国朝鮮族青年連合会）及び高学歴中国朝鮮族の同級生と紹介者の協力ももとの、有効回答 68（調査Ⅰ）と 142（調査Ⅱ）を収集した。

第 6 章では、在韓高学歴中国朝鮮族の生活と適応に関する聞き取り調査内容で、2016 年 7 月から実施し、最新情報を得るため 2020 年 3 月～5 月にかけて、追跡調査を行った。その結果、アンケート調査だけでは得られない情報を入手した。

終章では、個人化傾向、社会的ネットワークの活用、高学歴と中国ルーツを生かしたグローバルな教育戦略等から、在韓高学歴中国朝鮮族の韓国での適応状況が全般的に良好であることが明らかになった。しかしその裏には、労働、住宅、入管や銀行手続き、子どもの教育、親の老後問題等の苦悩や悩み、アイデンティティと心理的葛藤が伴っていたことも分かった。

## コメント

博士前期課程と研究生期間、6 年間の博士課程に加え、長々と 10 年に渡る留学生生活が博士号修了といういい結果で終止符を付けることができました。勉強が好き、研究力が高い或いは頭がいいというわけではない私、ここまで来られた原因は、出会いだと思います。大学、先生、家族、職場、同級生、諸団体等、この場を借りてすべての出会いに感謝します。

博士論文は自分にとって新たな挑戦であり、不可能に近いことでありました。博士課程で授業をやりこなすことは勿論、現地調査、訪問、二度目、三度目の訪問、調査紙の作成、配布と回収、聞き取り調査、査読付き論文、口頭発表、投稿、中間発表と公开发表等、一環一環の難関を一つひとつ乗り越えてきました。本論文を完成するに際して、改めて自分自身の不足な部分と分からないことだらけのことを全身で痛感しました。立場的に母親でありながら妻であり、娘でありながら大学院生でもある自分自身の時間が限られている中、子どもを寝かせた後、博士論文と付き合う静かな夜も贅沢で、いい経験でした。しかし去年の 6 月は心身ともどん底に苦しい時期がありました。温かい言葉と視線で見て下さった人が近辺にいてくれたお陰で、すぐに立て直すのは難しかったが、博士論文を途中で諦めず継続できるパワーをもらいました。ありがとうございます。

本研究の現地調査を通して、民族、言語、政策、適応、悩み、苦勞の数多い困難や障害を前にしても決して倒されず、海外で個々人が適応戦略を立てているのを見てきました。難関を乗り越えて、前向きに生活している方々の百人百様の人生を見て、彼らの勇気、賢さ、生活の智慧、心遣いに影響されました。生きて行く上で、得難い財産ともなるエネルギーとパワーをも沢山もらいました。ここで再度、すべての出会いに心から感謝します。

「会うは別れの始め」があるように、人との出会いとコミュニケーションを大事にすることを継続的に大切にしながら、今後も研究室や学会での経験を糧に、新しいスタートラ

インに立って、新しいことに挑戦し、社会に有用且つ役に立つ人になることで、出会った人々へのお礼と恩返ししていきたい。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第9期修了生)

(2022年4月5日原稿受理)

**知究人 37** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

### 「藤井研究室での活動を生かし実務へ」

宇都宮大学大学院

地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻

グローバル・エリアスタディーズプログラム2年

福原 玲於茄

皆様こんにちは、2021年度より地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムに所属しております福原玲於茄と申します。私は、アフリカの紛争や平和構築について研究を行っており、2022年3月よりアフリカ連合(AU)日本政府代表部の専門調査員として、エチオピアに赴任しております。これまで私は、指導教員の藤井広重先生よりご指導いただきながら、アフリカにおける人権侵害や平和構築への理解を深めてまいりました。例えば、2019年に参加しました、オランダでのゼミ合宿と赤十字国際委員会(ICRC)主催国際人道法模擬裁判大会は、これまでの活動の中でも印象的な経験の一つです。ゼミ合宿では、国際的な重大犯罪を実行した者を裁き、紛争被害者への支援を行う国際刑事裁判所(ICC)と被害者信託基金(TFV)を訪問し、関係者から直接お話を伺う機会をいただきました。国際裁判の雰囲気や紛争被害者への支援活動について深めた経験を生かし、ICRC主催模擬裁判大会では、国際人道法と呼ばれる紛争下のルールに則り、攻撃の違法性などについて実際に議論し、人道法へのより深い理解と英語の運用能力を高めました。失敗した経験の方が多い学生時代でしたが、自分自身の弱点を知り、そして成長へとつなげるための機会を多くいただけたからこそ、今の自分があるのだということを、実務に携わらせていただく中で、より強く実感しています。

現在は、AU日本政府代表部の専門調査員として勤務しており、実務を通して様々なことを勉強させていただいております。特に子どもと女性の人権、ガバナンス及びアフリカの法の支配に関するアフリカ情勢に関する調査、分析に携わらせていただいております。AU情勢に加え、アフリカ諸国の動向も把握する必要があるため、毎日沢山の報告書及びニュースに目を通さねばならないという点で大変なこともあります。大学院で学んだ知識を実務にて直接生かすことができていると感じており、非常に充実した日々を送れてい

ると感じております。当地でしか得られない情報やネットワークが多々あることから、これらを生かしながらさらに自身の研究活動をより良いものにしたいと思っております。

末筆ながら、この度寄稿の機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。今後の研究生活が実りの多いものになるよう精進して参りたいと考えておりますので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

(国際学部第 23 期生・国際学科第 01 期生)

(2022 年 4 月 24 日原稿受理)

**海外だより 31** 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

**海外留学今昔 32** 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**学生サロン 20** 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**キャリア指南 15** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

**フォーラム** 2022 年の皁月を迎えて、皆様忙しいことと思っております。(原稿集めに苦勞して  
います。)

### 「パッションを育んだ場」

獨協大学非常勤講師  
日本ペルー共生協会会長  
**小波津 ホセ**

宇都宮大学への 3 年次編入学は、端的に言えば、地球の裏側から自費で挑戦する人は今後でないほどの偉業でもあると考えている。奨学金や交換留学制度を利用して地方の国立大学への挑戦の方がまだ現実味があり、理解は得やすい。筆者のこの挑戦には、今でも継続する「情熱」があったと振り返る。

3 年次編入から博士課程修了までの 8 年間所属した田巻ゼミには多様な背景を持つ人が多かった。多様の意味は、国籍や年齢等の先天的な側面と個性や人生経験等の後天的な側面が混載しており人材が豊富であった。大学段階・領域となれば当然視できる部分もあるが、

1 つのゼミへの集結には重要な接点が必要となる。回顧すれば、そこには田巻先生の「弱者」や「排除される人」への揺るぎない興味関心がキー概念となって「ホームレス」、「外国人児童生徒」や「夜間中学」等という枠組みの下、この場は成立していた。多様性を誘導するのは容易ではないが機能した空間となっていた。

この空間の構成員として、ペルーから挑戦することになった背景には、理不尽にも日本社会からペルー帰国を迫られた多くの子どもの姿が今でも思い浮かぶ。かれらも現在では多様な場所・領域で活躍するまでに成長しているが、平坦な道のみを辿った者は一人もないであろう。日本社会からの排除とも断言できるリーマンショック後の帰国支援事業は何も経済的に不安定だった家族の日常を変貌させただけではなかった。表向きの理由は「経済的打撃を被った家族への帰国支援」として成立したが、背景には職場や学校生活に適応できず帰国せざるを得なかった家族の排除にもつながった。学校で同世代や先生から抑圧的な態度や関心を持たれず帰国した子どもとペルーで接した筆者は自分の来日当初の状況等を回想しながら日本社会に対する不満を募らせ、結果的に一つの「情熱」が生まれた。「なぜ日本社会はわれわれ外国人に対してこのような態度をとるのか」「なぜ今の子どもは筆者と同様な被害に遭遇しないとイケないのか」。これらの疑問は 2007 年頃の話だが、今でも現場に関われば南米出身の子どもの減少は見られてもこの自問自答に大きな変化はみられないと感じている。

「あなたの常識は他者の非常識である」という言葉が今でも筆者の重要なフレーズであり、非常勤講師の授業内でも紹介している。多くの学生が再考するフレーズでもあるため日常生活では意識されないと強く感じる。日本にいる外国人の文化・習慣に限定した説明はしていないが、授業名もあり関連付けされることは多い。10年、20年前と比較すれば日本にいる外国人は可視化されている存在でもあり、かれらの態度に不満を抱く学生も多い。「道にごみを捨てる」「店に長居する」「列に並ばない」という感想を外国人特有と断言して不満をもらすが、「日本人はしないのか」「友達がしたらいいのか」と「提案」すると考えを改めることも多々ある。外国人という異質性が先行して対等な関係性の構築が困難なのである。それは、学校現場等でもみられ排除や差異化が当然視される。実際、関わっている NPO への相談も学校で対等な対応をされないと愚痴をこぼす親もいる。他者と自分の常識の位置づけを理解しないと両者の歩み寄りには困難だと思いながら授業や日々の NPO の活動を模索する状況である。

とはいえ、現在世帯をもち日々何かに打ち込むことは容易ではない。それでもペルーで芽生えた情熱は燃え尽き症候群にならず今でも火を灯っている。筆者自身の体験談、専門性の維持、次世代継承、親への感謝等と理由付けは対話する人によって変化はすると思うが、筆者自身の一つのアイデンティティであるともいえ、信念でもあるであろう。ただそれは、研究には「情熱、時間とお金」が必要だと宇都宮大学の田巻ゼミで教わったことから由来する。情熱を持ち、大学で枠組みをつくり、粛々と地道に取り組んできた成果でもある。大学生生活中は筆者にとって時間とお金(特にお金)は不十分だったと後悔すること

も多々あった。今では時間を十分に持てず、小幅でしか歩み続けられない。それでも多くの人に囲まれ、分野は違うが同じ方向に進む人と関わっていることは大切なことだと常々実感している。

現在でも移動の多い人生を継続して生きているが、今以上に他者を認め、情熱を持ち続けていきたい。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第10期修了生)

(2022年4月21日原稿受理)

### 東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から年2回発行(4月1日、9月1日)の変更になりました。

### EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の42号の内容は、1. イタリア ロシア産ガス供給停止「予想せず」 2 EU支部だより 一ちょっといい話 3 ピエターです。

### 編集者のひとりごと

●父から譲り受けた自家用車を車検に出したら、フロントのショック部分から油漏れがありました。そこで、修理するために部品発注をすれば製造中止とのことで修理ができず、安全のために走行不能になりました。父の代から29年間走行してきましたが、あらゆる箇所に不具合がでていたので、もう寿命と観念して廃車にしました。マニュアル車の醍醐味をもう味わえないのは、すこし寂しい気がします。現在はAT車が主流の時代では、マニュアル車に出会うことはもう不可能なことのようです。

●昨年3月の交通事故において、修理部品がないとのことでしばらく様子を見ていた時期がありました。その後、修理できる板金屋が見つかりなんとか元通りになった自家用車でした。いろいろと苦楽を共にしてきた思い出深い愛車でした。いままでありがとう。

---

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP**

(<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**[chikyukai@freeml.com](mailto:chikyukai@freeml.com)

---

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会